

説教 『永遠の契約』山本 護牧師
聖書 イザヤ書 54:10／コロサイの信徒への手紙 1:19～20

「山が移り、丘が揺らぐこともあろう。しかし、わたしの慈しみはあなたから移らず、わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはない、あなたを憐れむ主は言われる(イザヤ54:10)」。しかし、いつの世も戦争があるではないか、信仰者とはいえ苦しみが消え去らないではないか、と思うかもしれない。だから「神様のお気持ちはありがたいけれども、成果はほどほどに期待してはいかが」となりがちだ。

世界の事象であれ、各々の世間であれ、自分の事であれ、「あなたを憐れむ主」の働きを見極めることはできない。恵みが多いか少ないか、愛されているか裁かれているか、主の働きか悪の働きかは、感覚的には分からない。ただ次のようなことは分かる。最近の流行り言葉で、ずば抜けた能力を「神ッテル」と表現するが、それは慈しみ憐れむ「主」とは関係のない功利的な「神」に他ならない。

主に憐れまれる「あなた」とは誰か。「他のどの民よりも貧弱であった(申命7:7)」人々のこと。彼らが荒野の旅を守られ、豊穡なカナンに定住し、力を得て壮大な神殿を建てるまでになった(列王上6:15～22)。だがそんな神殿も破壊されて廃墟と化す。たとえそれが神の宮であっても、見えるもの(マ8:24)は「山が移り、丘が揺らぐこともあろう(イザヤ54:10)」の通り、諸行無常、盛者必衰の理を表す。

「あなたを慈しみ、憐れむ」と告げられた神の民は、国を失い世界中に散り、各々の地において主の「慈しみと憐れみ」を受けた。歴史を眺めれば苦難の年月だが、主の言葉を種子として特有の花を咲かせた。神の民は、恐ろしい迫害の中でさえ「わたしの慈しみはあなたから移らず(54:10)」という御言葉を受け取っていたのか。私たちキリスト者は、彼ら神の民の兄妹として召し出されている。

私たちは所有するものをやがて手放す。権利や財産ばかりでなく、身体も、思考も、感性をも、召される時にはすべて手放す。とはいえ神の民たる私たちへの「慈しみはあなたから移らない(54:10)」。人間の時間よりもはるかに長大な時の地殻変動で「山が移り、丘が揺らぐこと」はあろう。しかし、約束された「主の慈しみ」は私たちから去ることはない。私たちが生きている間にも、死んでいる間にも、「わたしの慈しみはあなたから移らず、わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことがない(54:10)」。

主の慈しみ、主の憐れみ、主と結ぶ平和の契約。これこそが私たちの真なる支え(コサ1:17)。世の変遷や環境の変化で、文明や自然は移り変わっても、主の恵みは決して失われることはない。主自らが約束されたものだからだ。それでは、どうしてこの「平和の契約」が成立しているのだろうか。

「十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられた(1:20)」。

十字架によって平和の契約が成立している。今、私たちが地にある時も、やがて召されて天にある時も、御子の十字架ゆえに「平和の契約が揺らぐことがない」。「神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせた(1:19)」。

つまり十字架とは、神御自身の死であった。すなわち「主の慈しみと憐れみ」は、神自らが「私たちの死」の許にやって来て結ぶ契約。ゆえに「平和の契約は揺らぐことはない(イザヤ54:10)」のである。

【おまけのひとこと】

時は変化 細胞が死んでアミノ酸になること 山や丘が移ること 太古 宇宙が現れると共に時も現れたと天文学の先生は凄いいことを言う 揺らぐことのない契約の外枠を語っているように思う